

社会性と良心の発達

奨励	内山 伊知郎〔うちやま・いちろう〕
奨励者紹介	同志社小学校校長 同志社大学心理学部教授 〔研究テーマ〕乳幼児の認知・感情発達の研究

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

（ローマの信徒への手紙 12章9―21節）

同志社小学校の校祖墓参

私は、最近、小学校にいる機会が多いということで、今日は小学生のを中心にお話をさせていただきます。小学校ですから1年生から6年生までが一緒に学んでいます。日本の1年生男児の平均身長は117cmくらいで、毎年5cmくらいずつ伸びて6年生では145cmくらいになるそうです。1年生と6年生では、身長もずいぶん伸びますが、身体だけでなく、こころの発達段階も大きく進み、6年生は随分しっかりしてきます。

同志社小学校では、春に仲良し遠足があり、1年生と6年生と一緒に校祖墓参をします。熊野若王子神社を通り過ぎ、若王子山を登るとそこには同志社墓地があります。新島襄先生、八重さん、開校時の宣教師など、同志社関係の方々のお墓があります。遠足では、小学校からバスで若王子山の上り口付近まで行き、そこでバスを降りると、6年生と1年生が手をつないで2人ずつ並んで列になって進みます。昨年のことですが、私が先頭付近を歩いていると、後ろで6年生の声がしました。1年生は歩道の奥へ、と言っていました。6年生が車道側になって歩いています。1年生を車から守っているんですね。

若王子山は1年生にとっては少しきつい坂で、なかにはお昼のお弁当を入れたリュックや水筒を持って歩くのが大変な子もいます。すると、6年生がその子のかばんも持って、自分のかばんと二つかついで上り下りをしているんです。自分の分だけでも大変なのに、思いやりのある子だと思いました。私が替わりに持とうかと言っても、大丈夫ですと言って歩く姿に素晴らしいさを感じるのには私だけでないと思います。

ところで、同志社墓地には、同志社小学校のクラス名になっているDavisとLearnedの墓があります。お二人とも同志社の設立に貢献した方です。同志社小学校は30人学級で3クラスあります。クラス名は1組とかではなく、Davisクラス、Hardyクラス、そしてLearnedクラスとなっています。DavisとLearnedは京都に滞在した方で、同志社墓地に墓がありますが、Hardyはワイルド・ローヴァー号の船主で、新島先生をアメリカでお世話した「アメリカでの父親」のような方です。アメリカ住まいですから、同志社墓地には墓がないわけです。

同志社小学校では6年生に新島先生の足跡を辿って、アーモストとボストンを訪れます。そこでボストンのハーディー家の墓があるマウント・オーバーン墓地を訪れます。芝生や木々の豊かな公園で、ハーディー家の墓の近くには深碧色の水をたたえる湖があります。その静寂の空間で小学生は礼拝を行い、ハーディーさんへの感謝を捧げます。この貴重な経験を児童期にできるのは、良心の形成に大きな役割を果たしていると思います。

ハーディーの厚情

ハーディーは、当時、ボストンで船会社を営む士でした。ワイルド・ローヴァー号の船長が新島先生を熱心さのある青年として紹介すると、会って話をするようになりました。しかし、会話力の不十分だった新島はうまくアメリカに渡った気持ちを伝えることができませんでした。そこでハーディーは新島先生を船員の宿であったセーラーハウスに泊めて、文章で気持ちを書くように指示しました。そこで新島先生は自分の気持ちを書き綴りましたところ、ハーディーの奥さんに思いが伝わり、ハーディー家で住み込み、勉強をすることとなりました。ハーディーは新島先生を自分の子どものように養い、自分が理事をしていたフィリップス・アカデミーで学ばせ、そしてアーモスト大学にも進学させたのです。

アメリカでは社会貢献をすることが重視され、寄付なども社会に尽くしたステータスになります。日本に比べるとずっと多額の寄付がされています。アメリカは新しい国であり、また、プロテスタントの国です。だから、自分のことは自分でやり、人任せにしないという自主・自立の精神が強く、おそらく、皆でアメリカを育てようという気持ち強いのではないのでしょうか。ハーディーはまさにそのような方で、ハーディー家では新島先生を自分たちの子どものように育てました。新島先生にとって、アメリカでの父親となったハーディーとの出会いは本当に幸運であったと思います。新島先生はきっとハーディーの期待に応え、アメリカ社会に適応し勉学を修めたのだと思います。

ハーディーは良い青年に出会い、新島先生はよい父親とも呼べる人物と出会い、双方の気持ちが一致したことが現在の同志社の根源となりました。

私自身も師と呼べる方が多くいます。そして、多くの貴重な経験をさせてもらいました。とりわけ、アメリカに在外研究で渡った時は、到着した3日後くらいには研究室の会議に加えてもらっていました。最初はそのチームの新規の研究テーマでしたので、事前の知識もなく、よくわからないまま座っていましたが、徐々に慣れてくると実験室の管理を任されたりもしました。その時は、研究環境に慣れ、研究室のメンバーに加わるために、ただ一生懸命にできることをするだけでした。新島先生がワイルド・ローヴァー号の中で船員をしたり、ハーディー家で勉学をした時も、私とは比べ物にならない熱心さだったのかなど思ったりもしたこともありました。

6年生の修学旅行ではアーモスト大学を訪問しますが、ジョンソンチャペル正面に掲げられた新島先生の肖像画は、戦時中も決して降ろされることはなかったそうです。新島先生がアーモスト大学で多くのことを学ぶと同時に、新島先生の人物は当時のアーモスト大学の方に今までにない東洋の発想を与え、感じさせたのだそうです。世話を受けることは決して一方ではないようです。

世話し世話される双方向性

世話という行為には、世話をする者、世話をされる者の両者が必要です。世話をする者だけでも成り立ちませんし、世話を受けようとする者だけでもだめです。

同志社小学校では、「ワイルド・ローヴァー」と呼ばれる学年の縦割り交流が多くあります。給食の準備、掃除の仕方、共に行う共同作業など、様々な形で教え教えられます。世話を受ける下級生は上級生を慕って、いろいろと手ほどきを受けています。でも成長するのは下級生だけでなく、上級生も同様です。上級生になって、下級生をリードする立場になると、それまでと違ってしっかりした顔つきになります。リードする責任感が芽生えるからだと思います。

社会の中で一人前の人間として生活していくためには、社会の中での自分の役割を理解することが大切です。世話する立場、世話される立場、それぞれがその社会の中で役割をもちます。それを正しく認識し、相互作用することにより、ともに世界を感じることができます。社会的な役割能力を身に着け、他者の視点もとりいれて、周囲の人とともに世界を知ることが良心の根源となります。

良心という語はconscienceという英語、あるいはGewissenというドイツ語が日本に入ってきたときに訳語として当てられました。これは語源を見ると「共に」「知る」ということです。ではだれと共に知るのか。他者と共に世界を知ることが良い心の根源にあります。あるいは、神と共に知るという神の教えに従うことが良心の基準と考えることもあります。

そこで、心理学の視点から、子どもがどのように他者と共に世界を知ようになるのか考えてみます。小学校の低学年では、概念による思考ができるようになりますが、まだ自己中心的な思考が優勢です。たとえば、三つ山研究といわれる有名な研究があります。子どもの前に置かれた机の上に三つの山を作ります。大きな山、中くらいの山、小さな山の三つです。これらを配置して、机の四方からその山々を見ると四方からの見え方がすべて異なります。

子どもに四方からの4枚の絵を見せ、今自分が見えている絵を選ばせると、正しく答えることができます。そこで、今度はその位置に人形を置いて、子どもは対面の位置に移させます。そして、人形はどの絵が見えているかを尋ねると、自分のいる位置から見えている絵を選ぶのです。本来でしたら、自分が前にいた位置にある人形から見た絵を選ぶはずですが、それはできません。自分の見えている景色が思考を強く支配しているのです。これを自己中心性といいます。小学校の高学年になると、それが薄れていき、他者の視点がとれるようになります。

社会性発達の起源

このような社会性の発達の起源の一つに保護者とのコミュニケーションがあります。保護者とは誕生以来、世話をとおして最も密接なつながりができます。ただ見つめあう二者関係から、外の世界を理解するために第三者が加わるコミュニケーションへと進みます。つまり、二人で外の世界を共有します。たとえば、犬が歩いている時に、保護者が犬を指差して「ワンワンがいるね」と言って子どもに話しかけます。そこで、二人の世界から犬が加わった外の世界に思考の枠組みが広がります。同じ対象に注意が同時に向くことから共同注意と言われます。共同注意によって、さまざまな事象を理解していくことができます。転んだ人を見て、「痛そうだね」と言うのも第三者の気持ちを共感する学びのコミュニケーションとなります。

この時、母親の子どもに対する独特の話しかけ方を「マザリーズ」と言います。母親は子どもの関心をひきつけるために、ゆっくりと抑揚をつけて話すと子どもは興味をもって聞いてくれ

ます。子どもの関心を引きたい時や記憶に留めてもらいたいことを話す時にマザリーズは有効です。母親が子どもに教えたいことを伝えることは社会の理解の促進に欠かすことのできないことです。

子どもの社会性を発達させることは外界への理解を促進することになります。そして、さらに他者の気持ちの理解、他者の視点の理解へと繋がっていきます。他者の気持ちが理解できると共に知るための力となり、自分中心の発想にならずに考えることができるようになります。他者と共に世界を知り、神の教えに沿うよう、神と共に知ることが、同志社の良心を涵養する一つの道であると考えます。人と人が繋がる社会において、決して独りよがりにならないことが良心の発達に大切であると思います。

2016年11月2日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録